

群衆のテキスト

——『アーサー・ゴードン・ピムの物語』に関する考察——

森 本 光

はじめに

長編『アーサー・ゴードン・ピムの物語』（*The Narrative of Arthur Gordon Pym*, 1838. 以下、『ピム』と略記）の最初の数章が自身編集者を勤めた『サザン・リテラリー・メッセンジャー』誌に掲載された1837年1月、経営者T・W・ホワイトの解雇通告によりポー（Edgar Allan Poe, 1809–49）は同誌を退職し、同年2月にリッチモンドを離れてニューヨークへと移住する。その後、1838年7月に『ピム』は単行本として出版され、ポーはフィラデルフィアへと拠点を移すことになるが、この間のメモや手紙は数編しか残されておらず、それまでポーがニューヨークでどのように過ごしたかは明らかになっていない（Silverman 129–30）。しかし、職を失ったポーがこの街で苦しい生活を強いられたことは容易に想像できる。すでに編集者として名を馳せていたものの、生活の手立てを失ったポーは、無数の人で溢れたニューヨークという都市で「群衆」の中に埋もれかかっていたかもしれない。ポーが『ピム』に着手したのはニューヨークに移住する前年、1836年の終わりごろであるが、作家として地位が確立していたわけではないポーは、群衆に消えてしまう危険と隣り合わせであった。

この間に書き上げられた『ピム』は、文明社会から遠く離れた海や船上が主な舞台であるため、一見、都市や群衆とは無縁であるように思える。しかし、聖書や神話などの古典から同時代の小説や旅行記まで、無数のソースが指摘されているこの作品は、多数の書物や雑誌が入手可能な都市という空間でしか書かれないものである。また、この小説そのものが「商品」として市場で売れることを一つの目的としているため、それを支える大衆の読者の存在が必要不可欠だった。それゆえ、『ピム』は都市という条件の下で生まれたテキストであると言えるだろう。そして、多数の書物が流通する都市において書かれた『ピム』という作品そのものも、無数の書物の群れに消えてしまうかもしれないのだ。

このようにポーと長編『ピム』はともに、都市において「個」として生き延びることを必要としていた。それでは都市という条件や、群衆における「個人」という問題は、ポーの作品創作にどのように影響したのだろうか。本稿では、短編「群衆の人」（“The Man of the Crowd”, 1840）を補助線として、無数の人間や書物の中における「個」、および「個」の独自性という観点から『ピム』を論じる。それにより、ポーが都市において作品を書くことをどのように考えたかを考察する。

1. 「群衆の人」と海洋譚

まず、短編「群衆の人」とポーの海洋譚（sea stories）を比較し、作品の舞台である「都市」と「海」の類似性について指摘したい。「群衆の人」は 1840 年に二つの雑誌（『パートンズ・ジェントルマンズ・マガジン』、『キャスケット』）に同時に発表された短編小説である。この小説は、都市における「個人」の自己喪失を描いている。語り手はロンドンのカフェの一席から通りを行き交う街の人々を、集団の属性によって分類しながら、観察している。やがて語り手は、ある一人の老人に眼を惹かれると、カフェから抜け出し、謎の老人を追いかけて、その「秘密」を探ろうとロンドンの街をさまよい歩く。だがいくら追いかけても老人は同じ道を繰り返し辿るばかりで、正体は一向に知ることができない。日が変わっても追いかけて続け、疲れきった挙句、語り手はそれが無駄なことであったことに気づく。老人は「深い罪の典型かつ実相」であり、一人でいることを拒む「群衆の人」であること、そこから何も学ぶべきことがないことを語り手は悟るのだった。この小説において、都市における「群衆」は次のように描写されている。

This latter is one of the principal thoroughfares of the city, and had been very much crowded during the whole day. But, as the darkness came on, the throng momentarily increased; and, by the time the lamps were well lighted, two dense and continuous tides of population were rushing past the door. At this particular period of the evening I had never before been in a similar situation, and the tumultuous sea of human heads filled me, therefore, with a delicious novelty of emotion. I gave up, at length, all care of things within the hotel, and became absorbed in contemplation of the scene without. （Mabbott 507; 下線筆者）

ここで語り手に新鮮な感覚をもたらすのは、通りを行き交う「人々の頭の群れの波打つ海」である。ここで、ポーの視線は都市における「群衆」を「海」として捉えている。

ポーは都市と深いかかわりを持つ作家である。1809 年 1 月 19 日、エドガー・アラン・ポーはボストンで誕生するが、まもなく父デイヴィッドが失踪し、母エリザベスは病死する。わずか 2 歳半で両親を失ったポーは、その後南部ヴァージニアに住むアラン夫妻のもとで養子として暮らすことになる。商人であった養父ジョン・アランの事業拡大のため、1815 年から 1820 年まで一家はイングランドに移り住むが、そこでポーはロンドンの私立学校、および郊外の寄宿学校に通う。11 歳のときにアメリカに帰国し、ポーは青年期をヴァージニアで過ごすことになるが、家を出て詩人・短編作家として活動し始めると、ボルティモア、ニューヨーク、フィラデルフィアと、ポーは都市を移り住むことになった。都市生活者としてポーは数多くの短編を書き、また手紙等で都市の風景を様々にスケッチしている（伊藤 117-

23)。都市を見つめるポーは優れた観察眼を示す。「群衆の人」ではその能力を存分に活かして、人々の様子や街の風景を巧みに切り取り描写している。このように、ポーが都市の描写にこだわったからこそ、この小説で都市における「群衆」を荒々しい「海」に喩えたことは注目すべき事実だろう。

「海」は、「都市」と並ぶ重要なポーの作品の舞台である。「壇の中の手記」(“MS. Found in a Bottle”, 1833)、『ピム』、「大渦への下降」(“A Descent into the Maelström”, 1841)と、ポーはその小説家としての短いキャリアを通して海洋譚を書き継いだ。これらの海洋譚で、ポーは一貫して人間が「個人」としての意味をはぎ取られていく様を描いた。これは、「群衆の人」の老人に象徴される「都市」における「個人」の実存と同様の意味を持つ主題である。「都市」において、人々の群れの中に置かれた「個人」は徐々に自己を見失い、街をさまよう孤独な人間となるが、「海」においては、生命を脅かす荒々しい自然が人間に生の意味が不在であることを告げる。また、「群衆の人」と海洋譚は「古い」というテーマを共有している。「群衆の人」に登場する老人はしばしば語り手の分身として解釈されるが、「壇の中の手記」でも、語り手は自分の分身である老人の船長と出会う。また「大渦への下降」では、奇跡的な生還を果たした船乗りが突如として老人の姿に変貌してしまう。これらの作品に共通して登場する「老人」はすべて、語り手にとっての運命を象徴している。それは、時間的に有限な身体を持つ生物としての運命である。このように考えると、「都市」と「海」はともに人間が生きる目的を見失い、自分自身の運命と出会う場所である。そして、その運命とは、「古い」という生物に普遍の現象である。このように、海洋譚と「群衆の人」は共通した主題を持っている。

さらに、「群衆の人」との比較によって海洋譚は「メタテキスト」という解釈も可能になる。「群衆の人」で都市における人間は一冊の書物に喩えられる。そこには「罪」という読まれることを拒む秘密が書き込まれている。この秘密を求めて語り手は老人を追いかけることになるが、老人と語り手の関係は当然、「書物」とそれを解釈する「読者」の関係を示唆している。それでは「群衆」と「個人」の関係は何を示しているのだろうか。「個人」が一冊の書物であるなら、「群衆」はそれが寄り集まった無数の書物である。つまりこの小説においては、「群衆」の中の「個人」を、無数の書物の中の一冊の書物として読み換えることが可能なのである。このように見れば、都市における「個人」の問題は、無数に出版される書物の中の一冊の書物の問題と、等しい意味を持つと考えることができる。人々の群れと無数の書物をポーはどちらも海として捉えたのであり、そこには「個人」あるいは書物(テキスト)の問題があるのである。

2. 「書物」の海——ポーと文学市場

無数の書物が出版される出版業界の海において、ポーはどのような問題を抱えていたのだろうか。当時の社会の状況とポーが長編『ピム』を執筆した事情や背景な

どを改めて辿りつつ見ていくことにしよう。

ポーが作家として主に活動した 1830 年代、40 年代のアメリカは急速に都市化・産業化が進み、科学技術や流通システムの発達により新しい大衆市場が形成された時代であった。労働が機械化され生産性が向上したことによって人々は次第に裕福になり、文学を受容する読者層、雑誌や書物の購買層も大幅に拡大する。読者層の拡大が出版産業を活性化させ、雑誌や書物の発行部数もそれに伴って飛躍的に増大した。19 世紀前半のアメリカに無数の雑誌や書物とそれを受容する「群衆」の読者が現れ、文学の「市場」が形成される。作家が独自に芸術性を追求した文学作品も市場原理の影響の例外ではなく、マイケル・T・ギルモアを始めとして多くの批評家が 19 世紀アメリカ作家と市場の関係を分析してきた。ポーも当然、市場原理の影響の例外ではない。それどころか、自身雑誌編集者としても働いたポーは、最も強く市場を意識した作家の一人である。ポーは小説家としてのキャリアの最初期から文学市場を諷刺する作品を構想した。「フォリオクラブの物語」は、架空の文学サークル「フォリオクラブ」に文人たちが作品を持ち寄って互いに論評し合うという、凝った枠組みが設けられた小説集である。まとまった一冊の本として出版されることはなかったが、この小説集は当時の文学市場を諷刺した作品として考えられる。批評家アレクサンダー・ハモンドは、ギルモアの議論を前提にこの小説集と『ピム』を並べて論じている。ハモンドは作品の中の「食べる」行為に注目する。ポーの時代の文学で「物を食べることは」「書物を読む」ことの隠喩として用いられる慣習があった。ハモンドは、『ピム』と、「フォリオクラブ」に収録される予定だった作品における「食べる」行為が、読者が商品として書物を「消費する」ことを示していること、またそれらの作品に「カニバリズム」のテーマが共通し、そこに作家と市場の関係が暗示されていることを指摘した(163)。このように最も初期の作品にさえ、ポーの市場に対する強い意識が見られる。ポーは、市場における読者と作家の関係を一步引いた目線で眺め、そして、それに左右される作家たちを諷刺したのである。

しかし、もちろん、ポー自身も市場の外にいたわけではない。『ピム』執筆当時、貧困にあえいでいたポーは、自身の作品が市場で売れることを心から望んでいただろう。それではポーはいかなる市場の要求に従い、『ピム』を執筆したのだろうか。すでに述べたが、短編小説を書き始めた 1830 年代前半、ポーは度々小説集「フォリオクラブの物語」を一冊の書物として出版しようと試みた。しかし、作品を受け入れてくれる出版社が見つからず、その結果、収録予定だった個々の作品を先に『サザン・リテラリー・メッセンジャー』誌に掲載することになってしまった。その後、知己である先輩作家 J・K・ポールディングが、自身の本を出していた「ハーバー・アンド・ブラザーズ」社にポーの作品集の出版を掛け合うが、この試みはまたしても失敗に終わる。1836 年 6 月の手紙の中で「ハーバーズ」はポーに小説集の出版を断った理由を、「この国の読者は、一冊または複数冊の書物を単独で占め

る一貫性のある（とりわけフィクションの）物語に、明らかに強い嗜好を示す」（Thomas and Jackson 212）ため、すでに雑誌に掲載された短編を集めて再版しても売り物にならない、と説明した。当時のポーのパロディ作品や諷刺的な小品は一般の読者には「あまりにも学問的で、神秘的」（“too learned and mystical”）であり、しかも短編は読者には受けない。「ハーパーズ」にとって、長編こそが読者の求めるものであり、商品だったのである。このように、市場で価値を持つ長編小説でないことが、ポーが「ハーパーズ」に本の出版を断られた理由の一つだった。またそれ以前に、ポールディングがポーに長編を書くように勧めたことがあった。ポールディングは 1836 年 3 月の手紙の中で、「複数冊にまたがる一つの作品」（“A Tale in a couple of volumes”）（Thomas and Jackson 195）を書くよう、ポーに助言している。ポールディングがそうに述べる理由は、長編こそが読者や出版社の求めるものだからである。ポールディングも暗に述べている通り、作家として認められないうちは「売れる」作品を書くことがまず目標だろう。そのためにはやはり長編を書かなければならなかったのである。これらの出来事が、ポーを『ピム』の執筆に駆り立てる要因となったと言えるだろう（Weiner 45, Silverman 133）。つまり、ポーが長編に着手することになった事情には、市場の要求が大きく関係していたのである。

このようにポーには、市場に左右される作家を独自の目線で諷刺する「自分」と、市場の求めに応じて「売れる」作品を書こうとする「自分」の二人がいた。ポーと市場のあいだにはこうした複雑な関係があったのである。先述した助言に続くポールディングの次のような言葉は、当時の出版業界の事情とポーが置かれていた状況を物語っている。

There is a great dearth of good writers at present both in England and this country, while the number of readers and purchasers of Books, is daily increasing, so that the demand is greater than the supply, in mercantile phrase. Not one work in ten now published in England, will bear republication here. You would be surprised at their excessive mediocrity....Should you write such a work, your best way will be to forward the MS directly to the Harpers, who will be I presume governed by the judgment of Reader, also from long experience can tell almost to a certainty what will succeed. （Thomas and Jackson 195）

ポーが生きた当時、書物全体の読者層と購買層は急速に拡大し、それに伴って小説が「売れる」機会は広がっていた。しかし、大衆読者は次々と出版される作品を商品として消費するため、作品が読まれ続けることは困難である。ともかく「売れる」作品を書かなければならないが、読者に好みを合わせるだけの平凡な作家や作

品は、ただ消費されるだけで、すぐに忘れ去られてしまう。それゆえ、市場で価値を持つと同時に、ただ消費されるだけではない独自の芸術性を持った作品をいかにして書くかということが、当時ポーが抱えていた矛盾だったのである。

3.「群衆」の海——ポーと「オリジナリティ」の問題

ポーは大量の書物が出版される市場の海の中で作品を書くことを考えた。ここで沈んでしまわないためには、作家としても作品としても「独創的（オリジナル）」であることが要求される。それでは、ポーにとって「オリジナル」であることはどういう意味を持っているだろうか。ここで今一度「群衆の人」を取り上げ、「群衆」における「個人」の問題とポーの「オリジナリティ」について考えてみたい。

「群衆の人」の語り手は、カフェの一席で葉巻を口にくわえ新聞を膝にのせたまま、あてもなく、窓ガラス越しに通りを行き交う人々を眺めている。そこでは誰もがどこかへ向って急いでいる。彼らにはそれぞれ目的（地）があり、そこへ向ってまっすぐに進んでいるように見える。しかし、詳細に観察すると、人々の身なりや様子に表れている彼らの欲求が互いに似ていることに気づく。語り手はそれに応じて個人の特徴を集団の性質に還元する。こうして人々を分類する中で語り手が一人の老人に注目するのは、その老人がどの集団の属性にも似ていない「オリジナル」な存在に見えたからである。

With my brow to the glass, I was thus occupied in scrutinizing the mob, when suddenly there came into view a countenance (that of a decrepid old man, some sixty-five or seventy years of age,) —a countenance which at once arrested and absorbed my whole attention, on account of the absolute idiosyncrasy of its expression. Any thing even remotely resembling that expression I had never seen before. (Mabbott 511)

そして語り手はこの独創的な老人の目的（地）を探るため、老人を追いかけてロンドンの街を歩き回ることになる。

しかし、その後、街を彷徨するこの老人が実は何も「はっきりした目的を持っていない」ことが繰り返し述べられ強調される。つまり、老人はそもそも特別な何かを持っているわけではない。この老人が他の誰にも似ていないのは、他人とは違った「オリジナル」な存在だからではなく、ただあらゆる集団の属性を拒絶しているからである。都市に生きる人間は多数の役割から一つを選択し、意識的・無意識的にその社会的役割を「演じる」ものである。自分自身に固有の目的を心のどこかで求めながら、現実には既成の役割を反復するしかない。しかし、老人はそうした都市における「演劇性」を否定する。誰にも似ていない「オリジナル」な人間である

うとして、その結果、老人は自己を見失い、目的もなく街を歩くことになるのである。「群衆の人」は、「赤き死の仮面」や「ウィリアム・ウィルソン」と同じ仮面劇の一つとして書かれた可能性が指摘されているが（巽 64, Mazurek 25-28）、確かに、個性を失って「顔」のない「群衆」となった人間は、顔を仮面で被った仮面劇の演者に似ている。そして結末もまた、分身の背後に何も存在しないことを発見する二つの「仮面劇」と同様、自分が何でもない存在であることが明らかになるのである。「群衆の人」の老人には語り手自身の意識が投影されていると考えられるが、「誰にも似ていない」老人を追跡した結果、語り手はそれが「群衆の人」であることを知る。結局、都市において個人が「オリジナル」な自分を見出そうとして発見するのは、「自分」というものの不在である。ここで「群衆の人」のメタテキストとしての側面に立ち返れば、「群衆」における「個人」の問題とテキストの「オリジナリティ」の問題が重なる。他の誰にも似ていない「自分」が存在しないのと同じように、他のどの作品にも似ていない「オリジナル」な価値を持つ作品というものも存在しない。それゆえ、すでにあるジャンルや作品から離れて独創的な作品を書こうとしても、結局書くことはできないのである。

4. 『ピム』再読——「小説」ジャンルのパロディ

大量の書物が出版される出版市場で作品を書こうとするポーは、「売れる」作品を書かなければならないが、単に読者の好む形に合わせて作品を書くことはできなかった。だからといって、既存の形式から自由になって「独創的な」作品を書くことが不可能であることもよく分かっていた。ポーがこうした矛盾に対して出した答えは逆説的なものである。ポーが取った戦略とは、「オリジナリティ」を自ら放棄し、「パロディ」を書くということである。

すでに述べたようにポーは小説家としての出発点から、文学市場やそれに翻弄される文壇を諷刺した作品を構想し、また実際に執筆していた。ポーが『ピム』を執筆し出版したのは、よく言われるように、ポーの作家としてのキャリア（最初に詩集を出版した 1927 年から亡くなる 1849 年まで）のちょうど中間に位置する。しかし、小説家としてはキャリアの前半であるため、すでに言及した未刊の小説集「フォリオクラブの物語」に収録される予定だった作品など、初期作品とのスタイルの類似がしばしば指摘されている。ポーは自ら手紙の中でそれらの作品群について「半分は冗談で、半分は諷刺」（“half banter, half satire”）（Ostrom 1: 84）と言及している。バートン・R・ポーリンはこのスタイルが『ピム』にも共通していることを指摘する（*Collected Writings*: 5）。またポーリンは、この小説が海洋小説および少年向けの冒険小説のパロディであり、それらの様式を借り受けつつ、「大人の読者をからかい、少年をだまして夢中にさせること」がポーの意図だと述べている（*Collected Writings*: 8）。『ピム』のソースは多岐に渡り、海洋小説、冒険小説の古典（デフォー、スウィフト）やノンフィクションの旅行記・航海記（ベンジャミ

ン・モレル、J・N・レノルズ）、キリスト教の聖書や聖典など、ほとんど無数に存在するが、その「パロディ」の主たる対象は、ポーリンも述べている通り「海洋冒険小説」であると言ってよいだろう。

「海洋もの」の物語の中でおそらく最も重要なものは『ロビンソン・クルーソー』である。この冒険小説の古典は、直接『ピム』に素材を提供しているだけでなく、発想とテーマにおいても『ピム』の基となった作品である。ポーは『ピム』を書き始める直前、ハーバース社から新しく出版された『ロビンソン・クルーソー』を読み、1836年の1月の『サザン・リテラリー・メッセンジャー』に書評を掲載している。ポーはデフォーを手放しで称賛しているが、バートン・R・ポーリンの研究はこの書評の多くの部分が、ハーバース版の『ロビンソン・クルーソー』に収録されている散文「ダニエル・デフォーの伝記的素描」（“Biographical Sketch of Daniel Defoe”）の記述からの借用であることを明かしている（“Daniel Defoe”: 6）。したがって、ポーの賛辞も書評の内容も単純に受け取ることはいけませんが、ポーがこの作品をどのように捉えていたかはうかがい知ることができる。

ポーが挙げている『ロビンソン・クルーソー』の価値は次の三点である。記述の「真実らしさ」（“verisimilitude”）、「誰もが書けるような文体で書かれていること」（“we close the book, and are quite satisfied that we could have written as well ourselves!”）、「完全な孤立状態に置かれた人間」（“man in a state of perfect isolation”）を描いていること、である（Thompson 202）。この三つの点を現代の視点で言い換えるならば、「リアリズム（写実性）」「散文的文体」「個人主義」となる。『ロビンソン・クルーソー』は「海洋冒険小説」の古典であるだけでなく、「リアリズム小説」の古典でもある。「小説（Novel）」を近代に成立した一つの文学ジャンルとして考えるときに、この作品が起源として位置づけられることも多く、その理由として上記の三点は欠かせない要素である。このように考えれば、ポー（あるいは「伝記的素描」の作者）は、『ロビンソン・クルーソー』の「小説」としての特徴を正確に抜き出しているのである。そしてポーのパロディの意識はこうした小説の特徴を転倒させる。以下で『ピム』においてこれらの「小説」の要素が反転していることを三つの点それぞれについて検討する。

4.1. リアリズム（写実性）

「小説」の物語は基本的にフィクションであるが、それが本当の話であると主張する。例えば『ロビンソン・クルーソー』の序文は物語が事実であることを主張している。また、「小説」は個人の経験の詳細で具体的な事柄を描写し、読者にそれが「現実的」（“realistic”）であると信じ込ませる。『ロビンソン・クルーソー』では、語り手の書いた日記が孤島での生活の詳細な様子を読者に伝え、物語の「真実らしさ」を保証する。

『ピム』においてはそのような「真実らしさ」は最初から放棄されている。この

作品の序文では、ピムが「旅の期間の大半で日記をつけていなかった」ため、ただ「記憶」だけを頼りに物語を書かねばならず、「本来持つはずである真実の外観を持つほどには、綿密で一貫した陳述」ができない、という風に述べられている（Pollin, *Collected Writings*: 55）。このように、ポーは自ら物語の真実らしさを否定してしまう。またポーは序文の中に「ミスター・ポー」なる人物を登場させ、語り手ピムとの関係を明かした上で、ピムから伝え聞いた冒険の前半部分を「フィクションという装いのもと」（Pollin, *Collected Writings*: 56）で『サザン・メッセンジャー』誌（ポーが当時働いていた出版社）に掲載することを許可されたとしている。このようにポーは真実（ドキュメント）と虚構（フィクション）を織り交ぜて、その境界の判別不能な世界を創り上げている。

4.2. 散文的文体

物語に「リアリズム」を付与するため「小説」は散文の文体を採用する。「小説」が「本当らしさ」を獲得するためには、修辭的な言葉遣いを避けて出来るだけ即物的な書き方がされなければならない。具体的な出来事を事実 に即した言葉で読者に提示するのが、「小説」の文体である。

前述した通り、『ピム』においては「本当らしさ」はそれほど意味を持たないため、散文的な文体も重視されない。実際、物語の描写に「空想的な能力を刺激するような強い影響力を持つ出来事の詳細を伝えようとするとき、私たち全員にありがちな自然で避けることのできない誇張」（Pollin, *Collected Writings*: 55）が含まれることがあらかじめ示されている。ポーの文体は散文的でなく、むしろ隱喩的で多義的であり、一つの描写は何か別の事柄の暗示であるかのようなものである。例えばピムが閉じ込められる船倉の閉鎖空間はポー作品に頻出する「墓」あるいは「母胎」のモチーフとして解釈可能である。また、『ピム』全体や様々な場面に聖書的、神話的解釈が施されることも多い。例えば『ピム』の旅は冥界の王ハデスやキリストによる「地獄への下降」（“the descent into Hell”）という物語原型の再活用であるとする解釈（Farrell 23）などがある。ポーの隱喩的な描写がこのように多様な解釈を可能にしていると言える。

4.3. 個人主義

「個人」の具体的な経験を語るのが「小説」の第一の役割である。『ロビンソン・クルーソー』は、孤島に漂着した主人公が文明社会から切り離された状況の中でも合理精神を失わずに「個人」として生き延びる物語である。絶望的な状況をサバイバルする主人公クルーソーの性格の主な特徴を、イアン・ワットは資本主義とプロテスタンティズムに裏打ちされた「個人主義」であるとしている（81-128）。経済観念と宗教観念を内面化した近代的人間像をこの小説は描いているのである。

『ロビンソン・クルーソー』が社会から切り離された主人公が「個人」の意識によって生き延びていく物語であるとするなら、『ピム』は、「個人」の意識が徐々に薄れ、代わりに共同体的な精神が前景化する物語であるといえる。以下では小説全体を俯瞰しながら、この主題を辿っていく。

小説全体の縮図である第1章で、ピムとオーガスタスは酒に酔ったまま帆船エアリエル号に乗って船出し、絶体絶命の状況に陥るが、捕鯨船ペンギン号の船員たちの騎士道的正義感によって2人は救出される。2人の「個人」のために30～40人の船員が犠牲になったことが述べられるが、ピムとオーガスタスは翌朝平然と朝食のテーブルについて食事をする。ロビンソン・クルーソーが、多数の船員たちが犠牲になり、ただ自分だけが生き残ったことの意味を神に問い、生きる糧にするのとは対照的である。第2章から第8章まではダブル・プロットで物語が展開する。一つは船倉に閉じ込められたピムが暗闇の中で自己の時空間的規定を失っていく「個人」のプロットであり、もう一つは甲板の上で繰り広げられるグランパス号の船員たちの仲間割れと闘争という「共同体」のプロットである。第8章でピムは死者であるロジャーズに扮して甲板の上に姿を現して、甲板での闘いに加わる。

その後の第9章で、生き残ったピム、オーガスタス、ピーターズ、パーカーの4人は、大波と暴風雨に見舞われ生き延びるために船の巻き上げ機の残存部分にロープで身体をくくりつける。ここで4人は生死の運命を共有する小さな「共同体」を形成する。嵐が過ぎ去った後、戦闘で負った傷のためロープをほどく力さえ残されていない4人だが、ピムが力を振り絞って何とかロープをほどかなければそのまま全員が死んでしまう（Pollin, *Collected Writings*: 119）。ここで「個人」の運命は「共同体」の運命と重なる。ピムが何とかロープを切って4人は救われるが、第12章ではこの共同体にさらなる試練が課される。食糧を求めて船室に潜ることを繰り返す4人だが、求めた結果は得られず、全員が餓死する危険が迫っている。そこでパーカーが誰か一人が犠牲になってはどうかと提案する。「カニバリズム」という野蛮な行為に最初は抵抗を示しつつも、拒否し続ければひょっとすると自分が殺されかねないと感じ、結局ピムは他の3人に従い、くじ引きの結果、パーカーが犠牲となる。この場面でポーは極限状態における「共同体」と「個人」のあいだの関係を描き、「共同体」の存続を優先させる。この「共同体」と「個人」の関係は、より誇張された形でツアラル島人たちに投影される。ピムとピーターズを乗せたガイ船長率いるジェーン・ガイ号の白人たちとトゥー・ウィット率いる島の黒人たちは、黒人たちによる船の襲撃により大規模な戦闘を繰り広げる。船の爆発によりツアラル島人たちは1000人以上もの死者を出すが、「テケリ・リ！」の掛け声とともに彼らは意気揚々と引きあげていく。彼らにとって死者の数はあまり意味を持たない。ツアラル島人にとって重要なのはそれぞれの個体の死や生存ではなく、「民族」や「種」という「共同体」の生存なのである。

5. ハイブリッドと創造性

以上のような考察から結論すると、都市における無数の人間と書物の中で独自（オリジナル）の作品を追求したポーは「小説」という形式を逆転させてパロディを書いた、ということになるだろう。『ロビンソン・クルーソー』のような小説では「個人」が何よりも尊重されるが、「群衆の人」と『ピム』ではともに「個人」の価値は後退し「共同体」や「群衆」がより前面に表れてくる。このような結論は、「個人」よりも「社会」を上位に置くありきたちのものと思われるかもしれないがそうではない。

それを示すために、最後に『ピム』におけるハイブリッド（複数性）について考えたい。まず、「語り」のハイブリッドについてである。現代の小説の理論で考えれば『ピム』は語り手ピムによる「一人称小説」ということになるだろう。だが、そうした語りの形式による分類はこの小説に関しては意味をなさない。なぜなら、そもそも「一人称」という概念自体がこの小説では揺らぐことになるからだ。「一人称」の語り手は必ず一人であり、何の断りもなく語り手が別の人間に入れ替わってはならない。しかし、『ピム』においては、同じ「一人称」のなかでピムと「ミスター・ポー」が入れ替わってしまうのである。序文の末尾で「文体の違いが容易に見て取れるだろう」（Pollin, *Collected Writings*: 56）と述べられるものの、実際には文体の変化で区別することは困難である。もちろん、ポーの「サザン・リテラリー・メッセンジャー」解雇にともなう連載中断、およびその後の「ハーパーズ」での書物化という『ピム』の出版事情を考えれば、ピムと「ミスター・ポー」の語りは区別することができる。しかし、「ノート」で示されるピムの自死という事情により、『ピム』という作品全体に「ミスター・ポー」あるいは「ノート」の語り手の編集の手が加わっていることも考えられる。したがって、「一人称」の語りのなかに複数の人間の意図が渾然となって存在しているのである。こうしたハイブリッドは「語り」の問題だけに止まらない。小説中、主人公ピムには常に「バイ・プレーヤー」が存在しており、それは「ミスター・ポー」にはじまり、序盤はオーガスタス、後半以降はダーク・ピーターズとその役割が引き継がれていく。特にダーク・ピーターズは白人とネイティブ・アメリカンの混血児という設定であり、ハイブリッドを象徴する存在となっている。ダーク・ピーターズは物語の中で重要な役割を担っており、しかも結末において最後まで唯一生き残る人物である。ポーがこのキャラクターに与えた重要性は明らかだろう。ハイブリッドのダーク・ピーターズは、ポーが産み出した真に「オリジナル」な人物といえるかもしれない。

これまでの考察の延長線上で考えれば、この「ハイブリッド」にポーの独創性は託されていると言える。「個」の同一性にこだわれば、ジャンルや集団に分類されて結果的に無数の書物や群衆の海に沈んでしまう。むしろ積極的に複数のジャンルや集団の特性を取り入れ、それを組み合わせることで「独創性」は生まれる。だから、ポーは多数のソース、多数のジャンルを取り込み、それによって「オリジナル」

な作品を産み出そうとしたのである。ポーが、人々と書物であふれる都市において考えたのは、このハイブリッドという方法であり、『ピム』はこの方法を実践した書物であると言えるだろう。

参考文献

- Hammond, Alexander. "Consumption, Exchange, and the Literary Marketplace: From the Folio Club Tales to Pym." *Poe's Pym: Critical Explorations*, ed. Richard Kopley Durham : Duke UP, 1992: 153–66. Print.
- Lee, Grace Farrell. "The Quest of Arthur Gordon Pym." *The Southern Literary Journal* 4 (1972) : 22–33. Print.
- Mabbott, Thomas Ollive, ed. *Edgar Allan Poe: Tales and Sketches*. 2 vols. Chicago: U of Illinois P, 2000. Print.
- Mazurek, Ray. "Art, Ambiguity, and the Artist in Poe's 'The Man of the Crowd'." *Poe Studies - Old Series* 12.2 (1979) : 25–8. Web.
- Ostrom, John Ward, ed. *The Letters of Edgar Allan Poe*. 2 vols. New York: Gordian, 1966. Print.
- Pollin, Burton R. "Poe and Daniel Defoe: A Significant Relationship" *Topic*: 30, Fall (1976) 3–22. Print.
- , ed. *The Collected Writings of Edgar Allan Poe, Vol 1 - The Imaginary Voyages: The Narrative of Arthur Gordon Pym, the Unparalleled Adventure of One Hans Pfaall, The Journal of Julius Rodman*. Boston: Twayne, 1981. Print.
- Silverman, Kenneth. *Edgar A. Poe: Mournful and Never-Ending Remembrance*. New York: Harper, 1991. Print.
- Thomas, Dwight and David K. Jackson. *The Poe Log: A Documentary Life of Edgar Allan Poe 1809–1849*. Boston: G. K. Hall, 1987. Print.
- Thompson, G.R., ed. *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews*. New York: Library of America, 1984. Print.
- Weiner, Bruce. "Novels, Tales, and Problems of Form in the Narrative of Arthur Gordon Pym." *Poe's Pym: Critical Explorations*, ed. Richard Kopley Durham: Duke UP, 1992: 49–50. Print.
- 伊藤詔子『アルンハイムへの道——エドガー・アラン・ポーの文学』、桐原書店、1986年。
- 巽孝之『E・A・ポウを読む』、岩波書店、1995年。
- ワット, イアン『小説の勃興』、藤田永祐訳、南雲堂、1999年。

The Text of the Crowd

— A Study of *The Narrative of Arthur Gordon Pym* —

MORIMOTO Hikari

Summary: Edgar Allan Poe's *The Narrative of Arthur Gordon Pym* was first published as a single volume in July 1838. In 1837, the preceding year, Poe retired from the editorial job at the Southern Literary Messenger, which issued only two installments of the novel, and moved to New York City. There remain only a few letters and notes by him at this period, and it is not evident how he spent time in this city. Although *The Narrative of Arthur Gordon Pym* is mainly set in the sea away from a community, the condition of the city surely had a great influence on his composition of the novel. This paper, by reading his short story "The Man of the Crowd" in parallel, brings it to light how Poe thought of writing his novel in a city.